

新鉱開発の拡大

一方で、鉄道国有化は、北炭の独占輸送体制を突き崩し、これを契機に、財閥企業を中心とした北海道進出が活発化し、石狩炭田や釧路炭田などで新鉱開発が相次ぎました。

北海道の石炭生産は、昭和4年の世界恐慌の影響で足踏みを続けていましたが、次第に戦時経済色が強くなり、軍備拡張に乗って石炭市況は一気に活性化したため新鉱開発が相次ぎ、既存炭鉱の生産増強も相まって、戦時期になると全道の石炭生産量は、一時的に約1500万トンに達しましたが、戦後になると、無理な採炭の反動で生産量は低迷し、昭和21年には最盛期の3分の1である500万トン台にまで落ち込み、石炭の採炭量を増やすため、国策によって石炭産業へ優先的な資源投入が推進されました。



▲ 昭和20年代 幌内炭山の盆踊り。地域ごとに様々なやぐらが建ち、老若男女が浴衣姿で幾重にも輪を作るなど、活況な様子が伝わってくる。(三笠市)



▲ 昭和29年頃の映画館「茂尻座」(赤平市・茂尻炭鉱)

このような石炭を取り巻く好不況の波を繰り返しながらも、昭和32年には北海道の炭鉱数は158(うち石狩炭田で3分の2を占める)と最大となり、だんだんと機械採炭が本格化するなど生産量も戦前の水準にまでに回復し、第二のピーク期を迎えます。

特に、炭質が良く埋蔵量も豊富であった石狩炭田は、1960年代、わが国最大の生産量を記録し、産炭地としての地位を不動のものにしました。

この時期は、空知地域を含む産炭地域が最も繁栄した時代でもありました。まちの人口はどんどん増加し、学校の生徒数も急増。商店街は賑わい、映画は札幌市よりも早く封が切られ、昭和の「三種の神器」と言われた白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機が道内で最も早く普及したのも炭鉱地域の家庭だったと言われています。

エネルギー革命と閉山の影響

しかし、繁栄は長くは続かず、1960年代に入るとエネルギー革命が起こり、石油が急速に普及していきまし。道内の炭鉱は、石狩炭田を中心に1千万トンの生産量を維持していましたが、国内の生産体制は縮小していき、1980年代に入ると生き残った炭鉱も段階的に閉山し、平成7年には、石狩炭田で最後まで残った坑内掘りの炭鉱、歌志内市の空知炭鉱が閉山し、およそ120年間の歴史を閉じ、現在道内では露天掘りを行う7鉱だけが開鉱しています。

産炭地域はかつての基幹産業の衰退

旧住友赤平炭鉱立坑櫓(赤平市)

高さ43・8m、深さ650m。赤平市の中心部に近く「ネオンのともる立坑」といわれた炭都・赤平市の象徴的な存在。昭和38年に総費用約20億円をかけて建設され、平成6年の閉山時まで使用された。閉山後も機械や電気系統などが当時のまま残されており、現在も稼働させることができると言われている。

鉱車操作場や繰込場などもほぼ完全なまま残され、立坑に隣接する事務所には膨大な量の坑内図、経営資料が閉山時のまま保管されている。



に伴い、人口減少や経済の停滞などの課題を抱えています。

こうしたことを踏まえ、北海道では、平成19年3月に「北海道産炭地域産業振興方針」を策定し、関係市町(空知5市1町、釧路1市4町)などと連携を図りながら、産業振興策の着実な推進に努めています。

また、産炭地域では「北海道遺産」や「近代化産業遺産」に認定された炭鉱関連施設や文化等を活用した地域づくりが行われており、空知総合振興局でも各種取組に対する支援を行うほか、空知地域の「石炭」や小樽市の「港」、室蘭市の「鉄鋼」関連施設とこれらをつなぐ「鉄道」関連施設、いわゆる「炭鉄港」を活用した交流人口の拡大などによる地域活性化を図るため、地域間の連携に向けた取組を実施しています。

室蘭市

大正時代の輪西製鐵場

炭鉄港

ストーリー



(室蘭市提供)



室蘭の工場夜景



(室蘭市提供)

茶津岬の石炭棧橋



日鋼旧火力発電所



石炭列車で埋まる国鉄埠頭

(室蘭市提供)



昭和時代の日本製鋼所

(室蘭市提供)

鉄のまちの始まり

室蘭市の歴史は、今から約400年前の慶長年間（1600年頃）に、松前藩が、アイヌの人たちと交易をするために「絵鞆場所（えともぼしよ）」を設けたことが始まりです。明治時代には、北海道開拓計画の第一歩として、函館市・森町・室蘭市・札幌市を結ぶ札幌本道の開削が始まり、その後、室蘭市・函館市・青森県を結ぶ三港定期航路が新設されるなど北海道と本州を結ぶ海陸交通の要衝として発展していきました。

特に、北海道炭礦鉄道会社（北炭）が石炭積み出しのため、若見沢・室蘭（輪西）間に鉄道を敷設し、室蘭港が特別輸港として、石炭・米・麦・硫黄を海外へ直接輸出できるようになってから、北炭は日本海側の小樽港を国内向け石炭の供給地に、太平洋の玄関口を占める室蘭港を外国向け輸港にそれぞれ位置付けたことにより、室蘭港は飛躍的に発展していきます。

その後、明治40年代に入ると、北炭は英国アームストロング社・ピッカース社との3社合弁で日本製鋼所を設立し、輪西製鐵場（現在の新日鐵住金室蘭製鐵所）を建設するなど、自社の石炭を使用して、砂鉄と鉄鉱石との混合による日本最初の製鉄を開始しました。こうして、室蘭市は「鉄のまち」として発展し、今日の東北・北海道を代表する重化学工業・港湾都市となる基盤が形成されました。

北海道の工業地域として

第2次世界大戦時になると、室蘭市の軍需工場は重要施設であることから、政府の管理下に置かれます。製鉄・製鋼所は増産に次ぐ増産を続け、工場の機械は24時間稼働し、主要な作業は昼夜2交替制で行われるほどでした。

しかし、戦争が終結すると、原料である石炭が不足し、鉄鋼生産が八幡製鐵所（福岡県）で集中生産されることになったため、室蘭市の全高炉が操業中止となり、文字どおり火の消えたような状態となりました。

その後、鉄鋼の集中生産が解除されると、原料事情が厳しい中で、道内炭だけで製造した室蘭独自開発のコーライトコークスを用いて、全国の製鉄所の中でもいち早く生産を再開し、重工業地帯として復興の道を歩みはじめます。その後、昭和31年に富士セメント（現 日鉄住金セメント（株））、翌年には、日本石油精製（現 JX エネルギ（株））と大型企業が相次いで立地するなど北海道の工業地域としての地位を確立していきます。

現在の室蘭市は、官民一体となった地域づくりへの取組や、既存企業の新規事業への展開、市内工場夜景の新たな観光資源としての位置づけと「全国工場夜景都市協議会」への加盟、豊かな自然を生かした観光都市への脱皮など、様々な面で地域活性化への道を歩み続けています。